

コメント2

袁輪 顕量

四名の方の報告を聞き、それぞれに対して感じたことを中心に記してコメントしたい。まず「必然と偶然」とせずに「運命と偶然」としたことの意図を確認したい。

まず納富信留先生の「ギリシア哲学が直面した運命と偶然」はギリシア古典期の運命と偶然に関して論究するものであった。悲劇として有名な『オイディプス』には死すべき人間の運命に基づき運を意識する記述が多いが、哲学の中では、そのような運という要素を排除する傾向があるのではないかという。しかしそれは、背景に運命を意識したからこそではないかと推測する。逆説的ではあるが、ソクラテスは自らの運と幸福を区別することで自分の人生を引き受けたが、それも運命と関連すると捉える。そこにはテュケー（なりゆき）を重視する姿勢が見られる。人は「知らない」が、神は「知っている」とする。アリストテレスの『ソクラテスの弁明』を考察すれば、やはりアリストテレスも、運命という要素を捨てきれなかったのではないかと思われる。悲劇と哲学を生み出した古代ギリシア人は、運命を人間の生に本質的なものと捉えることで、それに立ち向かう倫理を構築したのではないかと考えられるという。

これらの事例から考えれば、古典期のギリシア人にとって、偶

然と思われるものも必然であると捉えていたと思われる。偶然も予期せぬ因果関係の中で生じるものと捉えられるのだとの見解は、とても興味深く、系列の異なる因果関係の束の中に存在するのが人間の生存ということになるのか。ある系の中に生きていて別の系の因果関係が見えずに生じた出来事が「偶然」ということになるのであるが、この関係はあらゆる出来事をすでに決まっていたものと見る運命論、決定論に落ちる危険性を帯びているようにも思える。さて、神の視点と人間の視点というのを想定されていたが、そこに時間という概念が関わってくると見て良いのだろうか。この点を質問させていただきたい。

次に古田徹也先生の「偶然とアイロニー——英米圏の現代哲学の一断面をめぐって」は、現代の哲学における運命と偶然を考察するものであった。それは、カント主義の影響を強く受けた現代社会は運や偶然を排除する方向に動いてきた、ところが現在、英米圏においてはその傾向に抵抗する「うねり」が生まれている、というものであった。一つは「道徳的運」であり、もう一つは「アイロニー」であるという。道徳的運とは、行為の結果だけではなく、事前の意志の形成にも無数の外的要因が影響を与えており、行為者のコントロールを超える場合があることに鑑み、道徳は運の問題と無縁ではあり得ない、とするものであるという。一方のアイロニーは、「世界は偶然に左右されており、人間の存在には「賭け」が含まれている」とするものである。これを正面から主張するのはアメリカ哲学界の巨匠、リチャード・ローティである。このアイロニーをローティとネーゲルという人物に焦点を当て、二人の

議論を追いかけ、その異同と意義を追求するものであった。その背景にプラグマティズムがあることを示し、アイロニーは、私たちの大事にするものさへ偶然であり、それは世界の見方を常に変化させ、新たな探究を生み出す源泉になり、それは人間の生の不条理さや馬鹿馬鹿しさに正面から向きあおうとするものだということである。ネーゲルは、ローティの立場に、知を抑圧していると批判的であるが、ネーゲル自身も世界が偶然であることを認め、しかも私たちが自分の人生の外側に実際に立つことはできない、として、逃れることのできない不条理が存在するけれども、それでも真剣に行い、目的を追求して生きるのだとするのである。ちなみにネーゲルの立場は、大乘の般若経の中に登場する、布施をする人も布施を受ける人も布施そのものも存在しない、それでも菩薩は布施をするのであるという記述を想起させられた。この現代のアメリカ哲学の見る世界は、偶然に重きを置くものといつて良いであろう。なお言語も偶然的な産物であるとの見解が示されたが、言語に関してはインド哲学仏教学の中に興味深い議論が存在する。それが継承され、中国の法相宗の開祖になる慈恩は私たちの認識には鏡が物を映すように捉える最初の働きがあり、次に分別、名言、尋思という働きが順に生じるのだと見ている。このような認識のあり方から見ると、ローティの思想は何となく仏教的な雰囲気を感じさせられる。彼には何らかの仏教的な素養があったのだろうか。また人生の不条理さは中国の老荘にも登場するようにも思われる。

次に中島隆博先生の「根源的な偶然性に触れる——日本と中

国の比較を通じて」は、根源に偶然性を置いた世界観に端を発した人物の思想に対する言及であった。人間に相關したものとしての世界という理解はすでに漢代に見られるものであるが、一方で根源的に偶然なる世界が想定されていたことを日本人の九鬼周造を例に展開する。九鬼の「偶然性の問題」における主張の特徴は、偶然性を通じて未来を志向していたこと、すなわち「不可能性が可能性に接する」ことであったという。つまり九鬼の述べる偶然性は、未来的な可能性を育むことになる理論だということである。一方、偶然論に与したと考えられる中国の王充（二七—九七頃）に触れるが、王充は確かに、それ以前の天人相關論からは離れているが、「氣」の運動によって支配されるという新たな運命論を開いたに過ぎないとするアンヌ・チャンの位置づけを紹介する。中嶋先生は、これらを踏まえて、王充には「運命による決定論を突き詰めていったとしてもなお残る偶然性」を認めた痕跡が存在すると評価する。東アジアの思想家の中から、偶然性に重きを置いたと考えられる中国漢代の王充や日本の九鬼を取り上げたのであるが、それは、世界を偶然性に根拠を置いて成立したものと捉える世界観が東アジア世界に存在することを示し、それは一方で、決定論といえども、それを決定的に決定したものであると位置づけることが困難であることを示したと評価する。

確かに日本を考えても、天人相關説が東日本大震災の時にも現れたように、運命を重んじる傾向があるように思われる。しかし運命すなわち決定論が決定的ではないことを、偶然論が示したということは、可能性としては逆もありはしないだろうか。偶然に

重きを置く世界観でも、偶然が決定的ではなく、なお運命論がくすぶり続けることを意味してはいないだろうか。そうだとすれば、これは必然性というのは偶然性の裏返し、すなわち両者は表裏の関係だと捉えていたと解釈して良いのかを問いたい。

次にスイスのチューリッヒ大学のラジ・シュタイネック先生による「運命と偶然の彼方?——道元の「有時」の思想」であるが、これは道元の著作を通じて、運命と偶然を考察するものであった。考察の主たる対象とされたものは「有時」である。道元の著作の中に運命とか偶然という表現は見えてこないが、だからといってそれがまったく無かったともいえない。「有時」の巻には法位、経歴という言葉が登場するが、これらは偶然に対するもので、縁起と因果と密接に関係しあいながら、時間の中に存在すると見ることができると捉える。「すべての存在者を時節として見る」というのである。各時節には「すべての時間が存在する」と捉えられ、それを道元は「而今」と表現したのではないかとシュタイネック先生は述べられた。そして、この観点を、運命、偶然という別の言葉で言い表された世界に照射すれば、そこには共通性を見出すことができるのではないかというのである。すなわち道元は法位、経歴、而今という表現を用いて、法位、経歴は、縁起と因果を経由して運命に繋がりと、而今は偶然に繋がりと見ていたのではないかという。つまり、運命と偶然の双方を想起させられるというのである。

時間を刹那（一瞬と置き換えても良い）という短い単位に区切り、そこにすべての有りようが凝縮されていると見るのは、仏教

の修行が常に今の一瞬を把握することと特徴とするところから生まれたものであろう。この短い時間が連続して存在するところに焦点を当てれば、前の刹那が次の刹那に繋がるのであるから運命を成り立たせ、短い時間のみが存在し、途切れているところに焦点を当てれば偶然になるような気がする。ただ、振り返ってみて「すべての存在者を時節として見る」という表現、何となく分かったような、分からないような感を覚えざるを得ない。この点をもう少し説明していただけないだろうか。

以上、四者の発表は、運命と偶然を巡って、時代と地域を別にしながら、その具体的な例を示してくれるものであった。偶然を排除する傾向が見られる古典ギリシャの時代、運命よりも偶然に重きを置くと考えられる東アジアの古代世界、そして日本の中世、道元の思索から、運命と偶然の双方が垣間見られる世界（それは表裏一体の世界といっても良いかも知れない）、そして最後に、偶然に重きを置き、それでも真剣に生きようとする思想が、現代の欧米の哲学世界に見られることが報告された。運命と偶然という、かくも古くて新しいテーマを巡って、四名の先生から興味深い報告がなされたのである。とはいえ、それぞれ地域に存在する文化的な背景の影響を受けているのではないか、それを表現する言語の問題を考える必要がありはしないだろうか、との思いを抱いた。さて、これは南アジア世界でも古来、議論のあったテーマであるが、そこでは運命と偶然は表裏一体のものという意識が強い。これは、道元という仏教者の中に流れ込んでいるように思われて

興味深いが、とにかく運命と思われるものも、偶然の要素を含んでいると理解しているように把握できる。これに対し、現代の西洋世界が、道徳的運とアイロニーという言葉で表現しているが、偶然に重きを置くように動いていると考えられることが興味深い。その意味を考えれば、すべてが運命であるとすれば、それはすぐには決定論に陥り、我々の努力もあまり意味をなさなくなる。あらかじめ決まっていたとすれば、偶然はただ単にそれに気づかなかっただけなのだということになりかねない。

一方、この世界のあらゆる物事が偶然であるとすれば、確かに未来が多様な変化を持つことを保証することになる。ある種の冒険心をかき立てられるような気がする。ところで、現在の量子力学がもたらした成果である不確定性原理は、この世界を構成する原子等の存在は確率的にしか捉えることができないというものらしいが、これはまさに偶然に重きを置く捉え方を導きはしないだろうか。また生物の進化も、或る生物が或る能力を獲得していくのは偶然であるという。その偶然によってもたらされた成果が、環境に応じて選択的に選ばれていく。哲学の周辺を眺めてみれば、現代の哲学の潮流も、量子力学や生物学が見出した成果に影響を受けてはいないだろうかという疑問が湧いた。

さらに現実の私たちの日常生活で必然と思われることが一体どの位あるのだろうか。仏教研究に身を置く筆者にとって、現実の世界は因果の連鎖の中にあり、縁（条件）によって生じるという縁起生の世界観に馴染みがあるのであるが、それは、運命の方に重きを置く価値観であるといって良い。しかし、それでも運命で

あるということは実感されにくい。唯一、そのような思いが抱けるのは、後から振り返った時である。時間が経った後の想起の中で運命であったと思われるのではないだろうか。物事が進行している最中には偶然が支配し、運命であった（すなわち必然であった）というのは、後時の想起の中に生まれてくるものではないだろうか。運命と偶然には時間という概念が何らか関与しているような印象を受ける。なお筆者はネーゲルの立場に共感を覚えたことを告白し、発表へのコメントとさせていただく。

（みのわ・けんりょう、インド哲学・仏教学、東京大学大学院教授）